

＋ 4 2 【てながあしなが】

ほかの村からぼくの村に、行商（ぎょうしょう）にきているひとたちの、手足がやけに長いと評判になっていました。

それでもべつだん、そのことを問題にするひともいない。

なぜなら、貧乏な村びとが、行商人たちの主となる品を買うことは、めったにないのですから。

買わないのに問題にするほど、意固地（いこじ）な村びとはおりません。

それでもぼくら子どもたちには、他意（たい）はなく、つまり無邪気（むじゃき）なきもちから、行商人たちを、

「てながおばさん」

「あしながおじさん」

「てあしながじいさん」

などと呼んでいました。

ただ妙なことが発端（ほったん）となって、問題が発生しました。

妙なことは、行商人たちの主となる品ではなく、ついでにもってきている食べもの（ぼくの村ではとれない果物）を買って食べたひとが、かならず手が長くなったり足が長くなったりし始めたのです。

ぼくは正直、うらやましかった。

もしお金があったら、珍しい果物を食べてみたい。

手が長くなったら、梯子（はしご）や踏み台を使わなくてもあれこれできるし、足が長くなったら、なによりも走るのが早くなるにちがいない。

懐爺にそういうと、

「それがそうでもないですよ。手が長くなると、手の重さで肩がこってしかたがない。足が長くなると、常に竹馬（たけうま）に乗ってる気分、めまいがします」

いわれてみればそうかもしれない。

「それはざんねんじゃのう」

「あれは【てながあしなが】というおぼけで、仲間をふやすために行商をやっています。ついでに担いでいるふりをしていますが、じつはそっちが主。みんな高価な果物ですから、ちょっとお金に余裕（よゆう）のあるひとは、どうしても食べたくなります」

ふりとはしらなんだ。

行商人はみんな演技達人なのでした。

「うまいのかのう」

「珍しいものや高価なものは、果物にかぎらず、格別に旨いなんてことはありません。栗や柿や林檎（りんご）のおいしさにくらべれば、まず下手物（げてももの）喰いというかんじですかね」

「げてもものは、くいたくなるのかのう」

「それが人間の性（さが）でして、【てながあしなが】はそれを利用しているのです」

「ほんで、あしながおじさんという、しんせつでやさしいおじさんののはなしを、よんだことがあるかのう」

「あれもじつは【てながあしなが】の仲間です。お金を寄付（きふ）したり恵（めぐ）んだりしながら、仲間をふやしているんですね」

「なかまになると、いいことがあるんかのう」

「仲間になること、そのことがいいことなんです。だれでも孤独（こどく）ですから仲間をほしがります。仲間ができれば仲間を増やしたがるものです」

「なるほどのう。しゅうきょうも、おなじかのう」

「宗教をやっているひとは、大半が【てながあしなが】ですね」

やっぱりそうか。

「わしも、がぜんきょうみがでてきたのう」

「興味だけにしておいたほうがいいですよ。肩がこったりめまいがしますからね。そうするとまた余計に宗教に頼る。たまに肩のこりがなおったり、たまにめまいが軽くなったりすると、宗教のおかげだということで、ますます【てながあしなが】を増やしたくなります。もちろんきれいな心で、親戚や友達や知人に肩こりやめまいで苦しんでいるひとを見ると、仲間になるようしつこいくらいに勧めます。きれいな心なのですから、しつこくやっても反省なんかしません」

「なるほどのう。するてえと、【てながあしなが】のもくてきは」

「そうなんです。主に新興（しんこう）宗教の勧誘ですね。行商をやれば寄付金もつくれるし、【てながあしなが】にとっては、まあ一石二鳥（いっせきにちょう）なのです」

やっぱりそうか。

「せっかくいっせきにちょうなのじゃから、【てながあしなが】をたいじするひつようはないのう」

「増長（ぞうちょう）しないかぎりは。けれども、新興宗教というものは、どういうわけか増長するんですね」

「どういうわけか、なんていっとるが、かいじいがわかっとるってことは、わしはわかっとるんじゃ」

「失礼しました。つまり、信じる力なんですね。その信じる力というものは、とてつもなく強いし、そのぶん押し付けがましくなります。自分が信じきっているんですから、他人が信じないのはどうしても許せなくなるんです。こういうことって、金ちゃんは理解できますか」

ぼくには理解できました。

ぼくの懐爺を信じる力が強いので、ぼくは自分の好きな人間は懐爺を好きになるに決まっているという思い込みがあって、懐爺に会わせたがる。

ぼくは宗教なんか嫌いなくせに、ぼくは懐爺信者なのです。

「世界中の戦争の大半は、いわば宗教と主義の戦争ですよ。自分の宗教や主義を信じきっている人たちは、他人の宗教や主義を信じたくない。それどころか憎悪することになります」

日本のことも解らないのに、世界のことをいわれても、こどものぼくに解るわけではない。

ぼくは【てながあしなが】に絞ることにしました。

「けっきょく、【てながあしなが】は、のばなしかい」

「訴える人がいませんとねえ。信じきっている人たちは訴えるわけもないし、元信者なんて人が、おれの半生返せなんてこととか、果物代金返せなんてこととか、訴えることはたまにありますけどね、だまされるあんたが阿呆なのよと、相手にされないことが多いんです。それに信じていたときは信じていたわけで、だまされたわけではないですからねえ」

「そういうもんかのう」

結論らしきものは、ぼくには理解できませんでした。

【てながあしなが】はぼくの村にはびこりましたが、なにせ人口のすくない村ですから、全国的な影響はまったくないと見受けられました。

【てながあしなが】も、ぼくの村に最初に手をだしたのがまちがいのもとでした。

ぼくの村の影響を受ける他の村や町はないし、ぼくの村から進んで他の村や町に出向く人なんていないのですから。

さすがの【てながあしなが】も、この村で次第に衰弱していく他はありません。

おそらく懐爺も、このことはお見通しだったのだとおもわれます。